

幼少期における親子分離と現在のアタッチメントとの関連

The Relationship between Parent-child Separation in Childhood and Current Attachment

山口 舞* 関谷 美希** 村井 あかり** 岡本 吉生***
Mai YAMAGUCHI Miki SEKIYA Akari MURAI Yoshio OKAMOTO

要 約 本稿では、幼少期における親子分離と現在のアタッチメントとの関連を分析して、その傾向を知ることが目的とし、成人男女 445 名を対象に質問紙調査を行った。アタッチメントと関連が深いと考えられる保育所等に預けられたときの親子分離場面に着目し、質問項目を設定した。成人期以降のアタッチメントは ECR-GO を用いて「見捨てられ不安」と「親密性の回避」の2次元で評価した。結果として、親子分離場面でよく泣いた子どもは現在の「見捨てられ不安」が高い一方、よく泣かなかった子どもは現在の「親密性の回避」が高く、どちらもアタッチメントが不安定であった。よって、子どもの頃の親子分離場面の状況は、将来のアタッチメントの安定性を予測する可能性が示唆された。子どもの親子分離場面における不安に対する親や保育者などの周囲の対応は重要であり、それぞれの子どもに合った対応をすることが求められると考えられた。

キーワード：アタッチメント、内的ワーキングモデル、親子分離、見捨てられ不安、親密性の回避

Abstract The aim of this paper was to analyze the relationship between parent-child separation in childhood and current attachment in order to determine trends. Four hundred and forty-five adult male and female subjects were surveyed. The questionnaire focused on parent-child separation at day-care centers, which is closely related to attachment. Attachment in adulthood was assessed in two dimensions, "Anxiety" and "Avoidance," using the ECR-GO. Results indicated that children who often cried during situations involving parent-child separation had higher current "Anxiety," while children who rarely cried had higher current "Avoidance," and both had insecure attachments. Thus, results suggested that situations involving parent-child separation in childhood may predict future attachment stability. Parents and daycare workers need to respond to a child's anxiety in situations involving parent-child separation, and an appropriate approach for each child is required.

Key words : Attachment, Internal working model, Parent-child separation, Anxiety, Avoidance

1. 問題と目的

子どもの頃の体験とその後に形成される内的ワーキングモデルは密接に関連していると考えられる。

* 東京大学大学院教育学研究科
Graduate School of Education, The University of Tokyo
** 人間生活学研究科人間発達学専攻
Division of Human Development, Graduate School of Human Life Sciences
*** 日本女子大学名誉教授
Professor Emeritus of Japan Women's University

特に、幼少期に養育者のもとで形成されたアタッチメントとその後のアタッチメントとの関連性、すなわちアタッチメントの連続性に関してはこれまで多くの研究が行われている。本稿では、幼少期の親子分離場面の状況と成人期以降のアタッチメントとの関連を分析し、その傾向を知ることが目的とする。Ainsworth et al. (1978)¹⁾ が、親子の分離と再会の状況から子どものアタッチメントを評価したことから、親子分離場面はアタッチメントとの関連が深い体験といえる。そこで、子どもが初めて日常的に

親と分離することとなる「保育所等に預けられたとき」に着目する。そして、大人になった現在の内的ワーキングモデルとなっているアタッチメントを評価し、子どもの頃の体験との関連を分析する。調査結果より、親子分離場面の子どもの状況が、将来のアタッチメントの安定性に繋がる可能性があるのかを検討することで、子育てや保育の実践の場に寄与する知見を得ることを目的とする。

2. 先行研究

(1) アタッチメントの評価

アタッチメントとは、生物個体がある危機に遭遇したり、それを予知したりし、恐れや不安の情動が強く喚起されたときに、特定の他個体への近接およびその個体との関係を取り結ぶことを通して、主観的な安全の感覚(安心感)を回復・維持しようとする行為の傾向である²⁾。多くの場合、幼少期の子どもにおける主要なアタッチメント対象は親であり、子どもは親を安心の基地とする。親などの養育者が子どもに対してどのように関わり、どのように振る舞うかによって、子どもは異なる特質のアタッチメントを形成していくと考えられる³⁾。Ainsworth et al. (1978)⁴⁾は、ストレンジ・シチュエーション法(Strange Situation Procedure: 以下、SSP)により、母親と乳児の分離・再会場面を設定し、子どもの反応や行動を観察することで、子どものアタッチメントの安定性を評価した。SSPを用いることで、子どものアタッチメントは回避型、安定型、アンビヴァレント型、無秩序・無方向型の4つに分類することができる。

成人のアタッチメントの評価方法には、大きく2つの流れがある。1つ目は成人アタッチメント面接(Adult Attachment Interview: 以下、AAI)である⁵⁾。AAIは面接法によって成人のアタッチメントを安定自律型、アタッチメント軽視型、とらわれ型、未解決型の4つに分類する。2つ目は、自己報告式尺度(Experiences in Close Relationships: 以下、ECR)である^{6) 7)}。ECRは一般他者に対するアタッチメントを評価する質問紙法であり、自己観と他者観(自己と他者についての内的ワーキングモデル)がそれぞれポジティブかネガティブかの2次元で捉えていく。自己観と他者観は、Ainsworth et al. (1978)⁸⁾により明らかにされた次元と概念的に重なり合う⁹⁾。自己観に対応しているのは「見捨て

られ不安」、他者観に対応しているのは「親密性の回避」である。「見捨てられ不安」が高い場合(=自己観がネガティブ)は「愛着対象に見捨てられるかもしれないという不安」があり、「親密性の回避」が高い場合(=他者観がネガティブ)は「愛着対象との親密な関係を回避したい」となる¹⁰⁾。この2次元を用いて、アタッチメントを安定型、拒絶型、とらわれ型、恐れ型の4つに分類することができるが、近年では4分類せずに2次元の量的な得点を割り出して行う研究が多い。ECRは度々改訂され、2000年以降のアタッチメント理論に基づく質問紙研究の中心となっている¹¹⁾。

AAIの実施には特別な訓練を要するため、本調査では質問紙で実施できるECRの日本語版尺度ECR-GO¹²⁾により、成人期以降のアタッチメントの評価を行うこととする。

(2) アタッチメントの連続性

乳幼児期に形成されたアタッチメントに関する内的ワーキングモデルは、生涯発達のその子どもが大人になったときの対人関係にまで影響を及ぼす¹³⁾。アタッチメントに関する長期縦断研究は、20世紀後半から米国のミネソタ研究をはじめ、欧米圏を中心に世界各地で実施されている¹⁴⁾。それらの研究より、乳児期から成人期に至る生涯過程において、アタッチメント対象は変遷し得るものであり、複数の発達期にまたがって、アタッチメントの質およびその延長線上にあるパーソナリティには、時間的連続性とともに変化可能性も認められる可能性があることなどが明らかにされてきている¹⁵⁾。つまり、成人期以降のアタッチメントは、幼少期の養育者との関わりによって築かれた内的ワーキングモデルを基盤とした連続性をもちつつも、その後の人生における環境の変化、発達、友人や恋人などのアタッチメント対象との出会いによって、変化していくものであるといえるだろう。しかしながら、アタッチメントの連続性を問うことは容易ではなく課題がある。前述したアタッチメントの評価方法に関してAllen(2021)¹⁶⁾は、乳児期と成人期のアタッチメントの間に精緻な理論づけが仮定されていても、子どものアタッチメント行動から実験観察的に評価を行うSSPと、成人がアタッチメントに関して抱く心的表象に関心を寄せて面接で評価するAAIでは全く異なる構成概念が扱われており、その関連性

をもってアタッチメントの時間的安定性は示されないと述べている。また、AAI と ECR もその構成概念が異なることから、同じアタッチメントという言葉を用いながらも両者の関連性は低い。これらのことから SSP、AAI、ECR は、内容的に合致するところ以上に、むしろ乖離するところのほうが顕在化してきていると言えるのかもしれないとする見解がある¹⁷⁾。

以上を踏まえて、本稿では幼少期のアタッチメントそのものではなく、アタッチメントと関連が深いと思われる親子分離場面の記憶が成人期以降の内的ワーキングモデルに対してどの程度連続性をもっていいのか、その傾向を探っていくこととする。

(3) 親子分離の影響の連続性

日本で幼児期の母子分離の状況と青年期の自己像との関連を検討した縦断研究がある。清水 (1999)¹⁸⁾ は、母子教室に在籍していた幼児の母子分離の状況を観察し、その幼児らが青年期になってから自己像についての質問紙調査を実施した。母子分離の状況は、分離群 (入所当初より安定して母子分離できる)、安定化群 (入所当初は母子分離できないが、次第に分離できるようになる)、不安定群 (分離場面において一貫した傾向がなく、母子分離が不安定) に分けられ、自己像はコンピテンス 3 因子 (受動的自己コントロール、社会性、能動的自己コントロール) と自己観 2 因子 (自己信頼感、不安感) が抽出された。この内、自己信頼感のみ母子分離の状況との関連が見られたが、幼児期の母子分離の状況が青年期の社会的発達を予測するという結果は得られなかった。青年期の社会的発達には、その後に訪れた転機の効果が認められた。そのため、幼児期の母子分離がうまくいかないことで青年期の発達まで問題が残るという法則定立的なことは言い難いと結論づけられた。

3. 方法

(1) 調査時期 2023 年 5 月

(2) 調査方法

インターネットのアンケートフォームを利用した調査を実施し、調査会社に登録しているパネルに WEB 上で質問紙を配布した。

(3) 調査対象者

WEB 調査会社が保有するパネル登録者のうち、成人男女 450 名程度に質問紙を配布した。最終的に 445 名 (男性 238 名、女性 207 名) が有効回答者となった。

(4) 倫理的配慮

質問紙の冒頭には調査結果の取り扱いや倫理的配慮について記載し、調査に対する同意が得られた場合に質問に進んでもらった。

(5) 質問紙の構成

① ECR-GO ② 調査者が独自に設定した、保育所等での親子分離場面を想定した質問 2 項目を使用した。それぞれの質問について、「以下の文は、あなたにどれくらいあてはまりますか。」という教示文を提示し、「あてはまらない」「ややあてはまらない」「どちらともいえない」「ややあてはまる」「あてはまる」の 5 件法で回答を得た。以下に質問項目の概要を記載する。

① ECR-GO¹⁹⁾

前述の通り、ECR-GO は一般他者に対するアタッチメントを評価する自己報告式の質問紙法であり、「見捨てられ不安 (自己観に対応)」と「親密性の回避 (他者観に対応)」という 2 つの因子から構成されている。本調査では、調査対象者の負担を考慮して高い因子負荷量を示している質問項目を抜粋し、「見捨てられ不安」18 項目のうち 13 項目、「親密性の回避」12 項目のうち 7 項目、全 20 項目を使用することとした (Table 1)。

② 親子分離場面を想定した質問項目

「初めて保育所等に預けられたときに、よく泣く子と言われた」(以下、「よく泣く子」)、「保育所等に行くことが楽しみだった」(以下、「楽しみだった子」) の 2 項目を設定した。アタッチメントと関連が深いと思われる親子分離場面を想起してもらうため、初めて保育所等に預けられたときの状況と、預けられた保育所等が調査対象者にとってどのように感じる場所であったかを簡潔に問うこととした。初めて保育所等に預けられたときの状況に関しては、調査対象者の体験として記憶が残っていなくても、親から後々聞かされたことで知った状況も調査対象者が成人になるまでに影響を及ぼす可能性のある記憶 (体験) の一部と捉えて分析することとした。

4. 結果

(1) 因子分析 (Table 1)

ECR-GO の 20 項目と、独自に作成した 2 項目の質問について、それぞれの回答の得点分布を確認したところ大きな偏りは見られなかった。そこで、主因子法による因子分析を ECR-GO の 20 項目に実施したところ、固有値の変化から 2 因子構造が妥当であると解釈した。中尾・加藤 (2004)²⁰⁾と同様に、バリマックス回転による因子分析を再度行ったところ、全ての因子が十分な負荷量を示した。第 1 因子は 13 項目から成り立ち、「私は一人ぼっちになってしまうのではないかと心配する」「私は、見捨てられるのではないかと心配だ」といった他者から見捨てられることへの不安を示す内容が高い負荷量を示した。第 2 因子は 7 項目から成り立ち、「私は、人に何でも話す (逆転項目)」「私は、人になぐさめやアドバイス、助けを求めることに抵抗がない (逆転項目)」といった他者との親密な関わりを避けようとする内容が高い負荷量を示した。どちらの因子も先行研究²¹⁾と同様の項目で構成されていたことから、それぞれ「見捨てられ不安($\alpha = .897$)」、「親密性の回避($\alpha = .815$)」と命名した。十分な信頼性を示したことから以降の分析に採用した。

(2) 相関分析 (Table 2)

因子ごとの相関を算出したところ (Table 2)、「見捨てられ不安」と「親密性の回避」の間に相関は見られなかった。これは先行研究の結果と一致した²²⁾。また、「よく泣く子」と「楽しみだった子」の間にも相関は見られなかった。「見捨てられ不安」と「よく泣く子」の間には 1%水準の中程度の正の相関 ($r = .354, p < .01$)、「見捨てられ不安」と「楽しみだった子」の間には 1%水準の弱い正の相関 ($r = .291, p < .01$) が見られた。「親密性の回避」と「よく泣く子」の間には 1%水準の中程度の負の相関 ($r = -.481, p < .01$) が見られたが、「親密性の回避」と「楽しみだった子」の間には相関は見られなかった。

(3) タイプ別の平均値の比較 (Table 3)

続いて、「よく泣く子 ($M = 2.71$)」と「楽しみだった子 ($M = 2.40$)」の得点をそれぞれの平均値で 2 群に分け、平均値より低い値を示した群を

「低群」、高い値を示した群を「高群」とした。「よく泣く子」と「楽しみだった子」の「低群」「高群」を組み合わせ、①「よく泣く子低群×楽しみだった子低群 (以下、低×低タイプ)」②「よく泣く子低群×楽しみだった子高群 (以下、低×高タイプ)」③「よく泣く子高群×楽しみだった子低群 (以下、高×低タイプ)」④「よく泣く子高群×楽しみだった子高群 (以下、高×高タイプ)」の 4 タイプに分類した。4 タイプの「見捨てられ不安」得点、「親密性の回避」得点を比較するため、一元配置分散分析を行ったところ Table 3 に示す結果が得られた。

「見捨てられ不安」得点は、低×低タイプより低×高タイプと高×低タイプと高×高タイプのほうが有意に高かった。また、低×高タイプより高×高タイプのほうが有意に高かった。さらに、高×低タイプより高×高タイプのほうが有意に高かった ($F(3, 441) = 27.2, p < .001$)。

「親密性の回避」得点は、高×低タイプより低×低タイプと低×高タイプが有意に高かった。また、高×高タイプより低×低タイプと低×高タイプが有意に高かった ($F(3, 441) = 31.7, p < .001$)。

5. 考察

(1) 相関分析

相関分析の結果より、「よく泣く子」と「楽しみだった子」との間に相関が見られなかったことは、子どもによって自己主張の仕方には差があり、親子分離場面における不安な感情の表出にも個人差があることが表れていると考えられる。

「見捨てられ不安」と「よく泣く子」の間に中程度の正の相関が見られたことから、分離不安が高い子どもは、成人期以降も不安傾向にあることが示されている。さらに、「見捨てられ不安」と「楽しみだった子」の間に弱い正の相関が見られたことから、不安傾向が強い子どもは、たとえ保育所等が楽しい場であると感じていても、親との分離不安の強さから、分離場面ではよく泣いていた可能性があると考えられる。

「親密性の回避」と「よく泣く子」との間の中程度の負の相関からは、2 パターンの予測ができる。1 つ目は、幼少期には不安傾向が強く、親子分離場面でよく泣いていたが、親の対応やその後の経験によって不安傾向が緩和されていき、安定的になったパターンである。2 つ目は、幼少期から成人期以降

も一貫してアタッチメントが安定していたと考えるパターンである。「親密性の回避」の得点が低いことは、人との適切な距離感を保てるということであり、アタッチメントが安定的であるといえる。

これは、初めて保育所等に預けられて親子分離する際に泣くことは健全な発達であり、アタッチメントが安定的な子どもはむしろ泣くことで不安を表出すると考えられるからである。

「見捨てられ不安」と「よく泣く子」の間に負の相関が見られなかったことを考えると、2 つ目のパターンの可能性が高いことが窺える。しかし、先行研究ではアタッチメントが安定的な子どもは親子分離場面で「多少の泣きや混乱を示す」となっており²³⁾、「よく泣く」とは異なる可能性があるため、今後明らかにしなければならない課題といえる。

Table 1 Factor analysis of the ECR-GO

	項目	F1	F2
F1「見捨てられ不安」13 項目 $\alpha = .897$			
14	私は一人ぼっちになってしまうのではないかと心配する。	.776	-.086
2	私は、見捨てられるのではないかと心配だ。	.721	.270
8	私は、知り合いを失うのではないかとけっこう心配している。	.735	.131
4	私は、いろいろな人との関係について、非常に心配している。	.709	.240
24	私は人に自分のことを好きになってもらうことができなかったら、私はきっと気が動転して、悲しくなったり腹が立ったりする。	.687	-.136
6	私が人のことを大切に思うほどには、人が私のことを大切に思っていないのではないかと私は心配する。	.639	.230
12	私があまりにも気持ちの上で完全に一つになることを求めるがために、ときどき人はうんざりして私から離れていってしまう。	.651	-.037
16	私が人ととても親密になりたいと強く望むがために、ときどき人はうんざりして私から離れていってしまう。	.628	-.167
32	私は、人が必要なときにいつでも私のためにいてくれないとイライラする。	.641	-.293
18	私には、人が私に対して好意的であるということを何度も何度も言う必要がある。	.601	-.013
30	私は、私がいてほしいと望むぐらいに人がそばにいてくれないと、イライラしてしまう。	.624	-.338
26	私が親密になりたいと望むほどには、人は私と親密になりたいと思っていないと私は思う。	.448	.253
22	私は、(知り合いに) 見捨てられるのではないかと心配になることはほとんどない。(R)	.397	.109
F2「親密性の回避」7 項目 $\alpha = .815$			
25	私は、人に何でも話す。(R)	-.152	.728
31	私は、人になぐさめやアドバイス、助けを求めることに抵抗がない。(R)	-.160	.648
15	私は、心の奥底にある考えや気持ちを人に話すことに抵抗がない。(R)	-.086	.630
29	私は人に頼ることに抵抗がない。(R)	-.035	.626
27	私はたいてい、人と自分の問題や心配ごとを話し合う。(R)	-.342	.566
9	私は人に心を開くのに抵抗を感じる。	.350	.597
1	心の奥底で何を感じているかを人にみせるのはどちらかというと好きではない。	.140	.529

(R) は逆転項目

Table 2 Coefficients of correlation between subfactors

	親密性の回避	よく泣く子	楽しみだった子
見捨てられ不安	-.082	.354**	.291**
親密性の回避		-.481**	.054
よく泣く子			.084

** $p < .01$, * $p < .05$

Table 3 Mean and SD of ECR-GO subscores by type

	低×低		低×高		高×低		高×高		
	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	
見捨てられ不安	2.408	0.800	2.723	0.602	2.796	0.657	3.166	0.605	低×低<低×高* 低×低<高×低** 低×低<高×高** 低×高<高×高** 高×低<高×高**
親密性の回避	3.794	0.715	3.888	0.681	3.148	0.708	3.255	0.586	高×低<低×低** 高×高<低×低** 高×低<低×高** 高×高<低×高**

** $p < .001$, * $p < .05$

以上のことから、幼少期の親子分離場面で「よく泣く子」は、アタッチメントが不安傾向あるいは安定的であった可能性があり、それが成人期以降のアタッチメントを予測しているかもしれない。

(2) タイプ別の平均値の比較

1) 見捨てられ不安

低×低タイプ、すなわち親子分離場面でよく泣かず、保育所等も楽しみではなかった子どもは、初めて保育所等に預けられたときには、まだ自我が芽生えておらず、その時点における状況が成人期以降のアタッチメントに影響を及ぼしていない可能性がある。そのため、この低×低タイプよりも、低×高タイプ、高×低タイプ、高×高タイプといった、よく泣いて感情を表出したり、保育所等が楽しみだったといった感情を抱いたりしていた子どものほうが、成人期以降の「見捨てられ不安」が有意に高かったのではないかと考えられる。

低×高タイプと高×高タイプは、どちらも保育所等に行くことが楽しみだった子どもである。低×高タイプは、よく泣くこともなく保育所等が楽しみ

だった子どもであり、素直に自身の感情を表出することができている。一方、高×高タイプは、よく泣くが保育所等が楽しみだった子どもであり、このタイプのほうが成人期以降の「見捨てられ不安」の得点が有意に高かった。相関分析の結果からも、成人期以降の「見捨てられ不安」の得点が高い場合、幼少期にはたとえ保育所等が楽しみでも分離不安の高さからよく泣いていた。よく泣くが保育所等が楽しみだった子どもというのは、感情の起伏が激しく、アンビヴァレントな傾向にあるといえる。さらに、高×低タイプより高×高タイプのほうが「見捨てられ不安」の得点は有意に高かった。高×低タイプは、よく泣いて保育所等が楽しみではなかった子どもであり、このタイプも感情の表出と自分の中に抱えている感情が一致している。一方、高×高タイプは前述の通りよく泣くが保育所等が楽しみというアンビヴァレントな傾向がある。

以上のことから、幼少期にアンビヴァレントな傾向にあった子どもは、分離不安が高く、成人期以降の「見捨てられ不安」も高いことが予測できるのではないだろうか。そして全ての結果において、「よ

く泣く子」は「見捨てられ不安」が高かった。

2) 親密性の回避

高×低タイプ、すなわち親子分離場面でよく泣き保育所等が楽しみではなかった子どもより、低×低タイプと低×高タイプのほうが、「親密性の回避」の得点が有意に高かった。低×低タイプは、よく泣かず保育所等が楽しみではなかった子どもである。この場合の低×低タイプが、もし前述したような自我がまだ芽生えていないタイプであれば、成人期以降のアタッチメントとの関連は薄いはずである。しかし、成人期以降の「親密性の回避」の得点は高かった。回避傾向にある子どもは、自分の不安や緊張のシグナルを養育者に受け止めてもらえなかった経験から、そのシグナルを最小化しようとする特徴がある²⁴⁾。そのため、この場合の低×低タイプは、回避傾向の表れであり、それが成人期以降の「親密性の回避」の得点の高さにも繋がっている可能性がある。低×高タイプに関しては、よく泣かず保育所等が楽しみだった子どもであり、素直に自身の感情を表出することができている。しかし高×低タイプである、よく泣き保育所等が楽しみではなかった子どもよりも「親密性の回避」の得点が高くアタッチメントの不安定性が窺える。つまり、保育所等が楽しみであったかどうかにかかわらず、よく泣かない子どもというのは、成人期以降の高い「親密性の回避」の得点を予測するのかもしれない。

次に、高×高タイプよりも、低×低タイプと低×高タイプのほうが「親密性の回避」の得点は有意に高かった。高×高タイプは、親子分離場面でよく泣き保育所等が楽しみだった子どもである。他方、低×低タイプと低×高タイプは、どちらもよく泣かなかった子どもである。保育所等の楽しさにかかわらず、よく泣かなかった子どもは、よく泣く子どもよりも、成人期以降の「親密性の回避」の得点が有意に高かったこととなる。これは、よく泣かない子どもというのは、成人期以降の高い「親密性の回避」の得点を予測するのかもしれないという前述の考察を支持する結果になったといえる。

3) 見捨てられ不安と親密性の回避

「見捨てられ不安」と「親密性の回避」の結果を合わせた考察を述べる。「見捨てられ不安」の得点は、低×低タイプよりも高×低タイプのほうが有意に高かった。反対に、「親密性の回避」得点は高×低タイプよりも低×低タイプのほうが有意に高かつ

た。これらの結果から、同じように保育所等が楽しみではなかった子どもの場合、よく泣く子どもは成人期以降の「見捨てられ不安」の得点が高く、よく泣かない子どもは「親密性の回避」の得点が高いということがわかる。

次に、「見捨てられ不安」の得点は、低×低タイプよりも高×高タイプのほうが有意に高かった。反対に、「親密性の回避」の得点は高×高タイプよりも低×低タイプのほうが有意に高かった。高×高タイプである、よく泣き保育所等も楽しみだったという感情的な子どもは「見捨てられ不安」の得点が高く、よく泣かず保育所等も楽しみではなかったというあまり感情的ではない子どもは「親密性の回避」の得点が高いことがわかる。

総じて本調査の結果からは、保育所等の楽しさにかかわらず、親子分離場面でよく泣く子どもは成人期以降の「見捨てられ不安」の得点が高く、よく泣かなかった子どもは「親密性の回避」の得点が高いといえる。よって、幼少期の親子分離場面と成人期以降のアタッチメントには関連がある可能性が示唆された。そのため、幼少期の子どもの親子分離場面の状況に対する親や保育者などの周囲の対応は少なからず重要であると考えられる。親子分離場面は、子どもだけでなく養育者も分離不安を引き起こされやすい場面であるが²⁵⁾、親子分離場面における子どもの状況から不安傾向や回避傾向を抱えている可能性を考慮し、それぞれの子どものに合った対応をすることが、生涯にわたるアタッチメントの安定性を支える基盤となるのではないだろうか。ただし、関連がないことを示す先行研究もある²⁶⁾ことから、その後の養育者の関わりも同様に重視する必要があるだろう。

6. 今後の課題と展望

保育所等における親子分離場面の子どもの状況には、親子関係だけでなく、子どもの年齢や家族関係、保育所等の環境、保育者の対応など、さまざまな要因が複雑に絡んでいる。本調査では、さまざまな要因があることは承知の上で「初めて保育所等に預けられたとき」の経験を問い、現在のアタッチメントとの関連を分析し、その傾向を知ることを目的とした。そのため、今後はより記述的な質問紙調査や主観的記憶を辿る面接調査の実施を重ねていくことで、そのほかの要因との関連も検討していくことが求め

られる。

また、本調査では幅広い性別や年齢の調査対象者の回答をまとめて分析したが、性別や年齢を分けて分析することで、より詳細な考察に繋がるだろう。親子分離場面と現在のアタッチメントとの関連性に性差はあるのか、幼児期の体験は年齢を重ねるほどに現在のアタッチメントとの関連性が低くなるのかなどといった疑問への答えが導き出せるかもしれない。

最後に、今回は ECR-GO を用いることで、成人期以降の一般他者に対するアタッチメントを評価した。今後、例えば ECR-RS を用いて自分の両親やパートナーといった特定対象へのアタッチメントを評価することなどによって、幼少期の親子分離場面の状況と関連性の高いアタッチメント対象と関連性の低いアタッチメント対象が明らかになる可能性がある。

本稿で得られた知見を手掛かりに、今後より精緻な調査を積み重ねていくことで、親子分離場面における子どもの不安に対して、目の前の子どもにとっても、そしてその子どもの将来にとっても有効な対応を考える一助を得ていきたい。

<参考・引用文献>

- 1) Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment : A psychological study of the strange situation*. Hillsdale : Erlbaum.
- 2) Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss Vol.1. Attachment*. (revised ed., 1982) Basic Books. (ボウルビィ, J. 黒田実郎・大羽葵・岡田洋子(訳) (1976). 母子関係の理論 I 愛着行動 岩崎学術出版社)
- 3) 遠藤利彦 (2021). 入門アタッチメント理論—臨床・実践への架け橋— 日本評論社
- 4) 前掲 1)
- 5) Main, M. & Goldwyn, R. (1984). *Adult attachment scoring and classification system*. Unpublished manuscript, University of California, Berkeley.
- 6) Bartholomew, K. & Horowitz, L. M. (1991). Attachment styles among young adults : A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 226-244.
- 7) Brennan, K. A., Clark, C. L. & Shaver, P. R. (1998). Self-report measurement of adult attachment : An integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships*, 46-76. Guilford Press.
- 8) 前掲 1)
- 9) 前掲 7)
- 10) 中尾達馬・加藤和生 (2004). 一般他者を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究, 5, 19-27.
- 11) 前掲 3)
- 12) 前掲 10)
- 13) 前掲 3)
- 14) Grossmann, K. E., Grossmann, K., & Waters, E. (2005). *Attachment from infancy to adulthood : The major longitudinal studies*. New York : Guilford.
- 15) Thompson, R. A. (2016). Early attachment and later development : Reframing the questions. In J. Cassidy. & P. R. Shaver (Eds.), *Handbook of attachment : Theory, research, and clinical applications (3rd ed.)*, 330-348. New York : Guilford.
- 16) Allen, J. P. (2021). Beyond stability : Toward understanding the development of attachment beyond childhood. In R. A. Thompson, J.A. Simson, & L.J. Berlin (Eds.), *Attachment : The fundamental questions*, 161-168. New York : Guilford.
- 17) 遠藤利彦 (2022). 発達連続性と変化を問うということ : アタッチメント縦断研究に見るアボリア 発達心理学研究, 33 (4), 193-204.
- 18) 清水弘司 (1999). 幼児期の母子分離型と青年期の自己像連続性と転機を検討 発達心理学研究, 10 (1), 1-10.
- 19) 前掲 10)
- 20) 前掲 10)
- 21) 前掲 10)
- 22) 前掲 10)
- 23) 前掲 3)
- 24) 前掲 1)
- 25) Hock, E., McBride, S., & Gnezda, M. T. (1989). Maternal Separation Anxiety : Mother-Infant Separation from the Maternal Perspective. *Child Development*, 60, 793-802.
- 26) 前掲 18)